

ふるさとの巡礼地を訪ねて（番外編） 旧奴可郡三十三か所霊場

番外編第二弾は旧奴可郡、現在の庄原市西城町と同東城町を合わせた地域である。

旧奴可郡三十三か所霊場の第一番札所は、西城町の熊野神社の奥にある滝本（たきのもと）観音堂、残念ながら倒壊して現在は存在しない。

あなとうと入江の波はみ熊野の奥の御山にひびく滝津瀬

この一番札所の御詠歌を理解するには、西国三十三か所霊場の一番札所、青岸渡寺（せいがんとし）の御詠歌を参考にするのがいいだろう。

補陀洛や岸うつ波は三熊野の那智のお山にひびく滝津瀬

三熊野は熊野三山のこと。似ているのも当然だ。奴可郡三十三か所霊場が本家本元で

ある西国三十三か所霊場を横断して作られたミニ霊場だからである。熊野にある青岸渡寺に倣って、西城町にある熊野神社の奥の院の観音堂を第一番札所とした。

滝本観音堂の御詠歌を意識すると、「ありがたいではないか、巡礼への旅の立を祝福するように尊い熊野の奥山に霊験あらたかな滝の音が響いている」となるうか。

西城町の古社、熊野神社も、紀州の熊野三山と深い関わりを持っている。中世には紀州の熊野修験者たちが、比婆山の周辺で修業を行っていたという記録がある。とまれ、熊野

神社や比婆山信仰に興味がある方は、庄原市が平成二十八年に発行した「日本誕生の女神伊弉那美（イザナミ）が眠る比婆の山」を読んでいただきたい。

熊野神社の参道の苔むした石段を登ってゆくと、巨大な杉の林の前に出る。天空に聳える御柱、これはもう神話の世界の景色だ。境内の巨杉の最大樹高は五十六メートルで、幹周り三メートル以上の杉は百本以上もあるという。ちつぽけな自分という存在を思い知らされたようで、自然と敬虔な気持ちになる。

参道が巨杉を避けるように



二ノ宮に至る参道



観音堂跡の背後の岩窟

左右に迂回している。老杉の樹齢は千百年以上経過していると推定される。巨木の方が神社よりも先に存在していたのだ。自然が主で、それを崇める人間の社が従なのは当然だろう。

本殿に参拝して、さらに奥へと続く参道を登った。沿道に群生しているシヤガの花が満開だった。二ノ宮、三ノ宮と通過して、本格的な山道となった。息を切らせて登ること十分分足らずで、「那智の滝」に到着。古名を「鳥尾（ちようのお）ノ滝」と呼んだというから、これも紀州熊野の「那智の滝」の影響か。

滝の右側の山道から少し上がった場所に、二坪ばかりの平坦な場所がある。説明板に「滝の下（もと）観音堂跡」と記されている。その背後の岩窟には、不動明王の石像が安置されている。

一番札所に祀られていた「瀧ノ観音」は、西城町平子にある曹洞宗・豊饒山能楽寺の寺宝として大切に保管されている。平井正澄住職に、無理を言って拝観させていたのだ。保安上の理由から、いつもは秘仏として公開はしていない。

立派な厨子に入った十一面千手観音菩薩



薩立像である。切れ長の目の凛々しいお顔に励まされて、巡礼の旅をスタートしたのだろうか。熊野神社から滝本観音堂跡までの山道は、かつての巡礼者が歩いた道である。霊場案内をスタートして、巡礼者としての気持ちを持って共有できたような気がする。神と仏が共存する日本人の信仰心を象徴するような場所であった。

能楽寺は、奴可郡三十三か所霊場の十番札所でもある。しかし、残念ながらそうした資料も御詠歌の額面も、確認することはできなかった。

後の世もこの世も共に寺の名も能（よ）く楽しむと聞くぞ楽しき

十番札所の御詠歌である。

以下、旧奴可郡三十三か所霊場の札所の名前と所在地だけ列挙しておく。西城町郷土研究会発行の「奴可郡札三十三ヶ所霊場と御詠歌」を上田輝馬氏が転記、その資料を転載した。最後に以下の解説文がある。
「ときに、帝釈未渡・永明寺住職村上誠龍師編になる『奴可郡札三十三ヶ所霊場巡拝案内記』（仮称村上版）が一覧表として出されている（大正から昭和初期ごろ）。これには、札所間の巡拝順路として、栗の浄久寺よりの道のりも記載されており、全行程三十里三十三丁とある。」

- 1番.. 滝本観音堂跡（西城町熊野）
- 2番.. 安養寺（西城町油木）
- 3番.. 観音寺（西城町大屋）
- 4番.. 胎蔵寺観音堂（西城町中野）
- 5番.. 神宮寺（西城町中野）
- 6番.. 全政寺（西城町西城）
- 7番.. 千手院跡（西城町西城）
- 8番.. 光普院跡（西城町入江）
- 9番.. 浄久寺（西城町栗）
- 10番.. 能楽寺（西城町平子）
- 11番.. 極楽寺（西城町八鳥）
- 12番.. 高松庵（西城町三坂）
- 13番.. 見性寺（東城町小奴可）
- 14番.. 雲龍寺（東城町森）
- 15番.. 萬松寺堂（東城町川鳥）
- 16番.. 徳雲寺（東城町菅）
- 17番.. 吉祥寺跡（東城町菅）
- 18番.. 医王寺（東城町塩原）
- 19番.. 妙楽寺（東城町内堀）
- 20番.. 正泉寺（東城町千鳥）
- 21番.. 妙音寺堂（東城町粟田）
- 22番.. 観音寺（東城町粟田）
- 23番.. 大奥寺（東城町粟田）
- 24番.. 法恩寺（東城町川西）
- 25番.. 太山寺（東城町川東）
- 26番.. 千手寺（東城町川東）
- 27番.. 正安寺（東城町川東）
- 28番.. 西方寺（東城町東城）
- 29番.. 学恩寺（東城町川西）
- 30番.. 能楽寺（東城町久代）
- 31番.. 円福寺（東城町帝釈宇山）
- 32番.. 広国寺（東城町帝釈未渡）
- 33番.. 永明寺（東城町帝釈未渡）

青木笙子『築地人形』(続)

倉田百三夫人・晴子の愛

郷里の文豪倉田百三と結ばれるも2ヶ月で離縁され、それでも百三を思慕して生きた高山晴子。その生涯を追ったのが青木笙子(しょうご)

『築地人形』(河出書房新社)です。

前回紹介しましたが、庄原と縁が深い作品なので、さらに触れてみます。

晴子は、後半生に東京・築地の劇団活動にかかわり、劇中の人物を人形にします。筆者は、そんな晴子の人形作りを追ううちに、百三に巡り会うという構成になっています。

筆者青木は、百三の生まれ育った地が見たいと庄原に来ます。「二〇一九年二月九日、倉田百三文学館へ向かった」とあります。なんと、昨年のことです。庄原では、多くの資料の提供を受けたとあり、「文学館前館長の松園真氏」「倉田百三友の会の土居緑さん」たちの名前を挙げて謝意を述べています。やはり、庄原の人は親切です。

さて、一高を退学した百三は、1914(大正3)年、庄原・上野池畔で思索した夏の末、病を得て広島

の病院に入院し、看護婦の晴子に出会います。晴子は百三に強く惹かれ、献身的な看護をし、恋愛状態になります。百三の病は悪化、転地療養や

構え、昔の恋人たちをそばに、汎愛主義を実行します。

大正6年3月、広島郊外の丹那で長男・地三を産みます。同年6月、戯曲「出家とその弟子」が大ベストセラーになり生活が一変します。単身上京した百三は大森に新居を

余裕ある生活をします。本の後半は、晴子が俳優薄田研二と結ばれた後、東京の新劇界で「築地人形」を作って暮らす姿が描かれています。

晴子は、「薄田のママさん」と呼ばれ、家には劇団の若い人々がいつも2、3人は寝泊まりしています。若者たちに慕われるだけでなく、薄田との間に2人の子どもが加わり、3人とも演劇人になっていきます。

それを一時支えたのは、芝居の登場人物に似せた人形作りで、1体が1円50銭。質屋通いをし、夜なべで人形を作っていたとは、子どもたちの証言。人形は、木綿の小布切れを着せた素朴なものです。台本を読み込み、芝居に目をこらす人形作りは、晴子の喜びでもありました。

百三の汎愛を真に受け、「尼になるしかない」と思い詰めた晴子ですが、その純粹さは失いませんでした。後年、「私は倉田と別れて彼との生活で得たものの大きさを知った」としています。

青春期の百三の精神性は、晴子の中に息づき、命脈を保ったのではないのでしょうか。哀しい表情が多かったという「築地人形」は、その象徴のように思えてなりません。

また読んでみたい本・番外編

青年たちに

音谷 健郎



【晴子・作、「ハムレット」のオフエーリア】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

今回は、青木笙子の『築地人形』(続)です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

奉仕修養所の京都・一燈園への入園。晴子は押しかけます。

やがて同棲しますが庄原の倉田家では、百三の妻と言うよりお手伝いさんとして扱います。「倉田家の豪華な生活にはなじめなかった」と述懐しています。

「草花の博物誌」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

ヤグルマソウ 鯉のぼりの先端の矢車に似た葉

青空を舞う鯉のぼりの生き生きとした姿を見るにつけ、子どもたちが急流にひるむことなく、上流に向う鯉のように、未来へ向ってたくましく育って欲しいという思いが募ります。そして、のぼりの先につけられた矢車が風でカラカラと音を立てて回っているのを見ると、子どもたちがすこやかな成長を応援しているように思えます。

うに思えます。 ちょうどその頃、中国山地の深い谷あいではヤグルマソウが芽をふき、矢車そっくりの葉を伸ばし始めています。やがて真夏を迎えると、葉の大きさも五十センチ近くになり、葉の間から長い茎を伸ばし、その先に白い小さな花をつけ、谷間にすがすがしいふん囲気をつくり出してくれます。



きっと、勘の鋭い皆さんのこと、ヤグルマソウの由来に気がついたことでしょう。そうです。ヤグルマソウは葉の形が鯉のぼりに添える矢車に似ているところから名づけられたのです。中国では鯉のぼりを立てる風習がないので、矢車草とはいわず、鬼灯撃(きと

うけい)というそうです。

鬼灯とは鬼の灯火(ともしび)、撃はささげもつという意味。葉の間から伸ばした茎につけた白い花を「鬼の灯火」に見立て、その鬼の灯火が葉がささげ持っているように見えるところから名づけられたようで、ところ変われば品変るのたとえではないが、草花の名前や名づけ方にもずいぶん違いがあるようです。

牧野富太郎先生の名著「牧野日本

植物図鑑」では中国名(漢名)を「鬼灯撃(きとうけい)」とされています。が、正しい中国名は「鬼灯撃」です。さすが牧野先生はヤグルマソウを鬼灯撃とするのは不適當と書かれています。全くそのとおりで、鬼灯撃の葉の先は矢羽のような形になっておらず、ヤグルマソウのなかまの別の種類です。ですからヤグルマソウは北海道や本州の奥山の夏を飾る固有の草花といえるようです。

ユキノシタ 見て食べて、薬にもなる金銀草

ユキノシタの白い花がさかりを迎えると、梅雨も終わりに近づき、夏の気配がにわかに濃くなってきました。ユキノシタは「雪の下」という意味。夏の花なのにどうして雪の下と呼ぶのだろうと、ふしぎに思う人は多いと思います。

ユキノシタという名前は、白い花

を雪に見たてて、葉が白い雪の下にあるということから名づけられたという説と、冬の寒さの中でも葉は枯れず元気で冬を過ごしているからという説とがあります。

花ざかりの頃、二枚の白い大きな花びらが一面にひろがっていると、雪がちらついているようにも思えます。

すし、冬、葉の上に雪がつもつていようと、水辺でしづきがかかってそれが葉上で凍っていても、葉が元気でたくましく生きている姿を見せてくれていると、なるほどと思います。どちらの説にもそれぞれ一理があるようです。

ユキノシタはキンギンソウ、トラノミミ、ミミクサなど地方によっていくつもの呼び名が残っています。いろいろな名前と呼ばれているということは、そこに住んでいる人びとと深いかわりがあったでしょうです。

県北ではキンギンソウと呼び、ユキノシタの若葉をつんでテンプラのたねとして、お祝いごとなどでお客さまをもてなすときのごちそうの一



品に、むかしはよく利用していました。

ユキノシタの若葉のテンプラは、もうとつくのむかしのことになりましたが、それとともにキンギンソウという呼び名も消えようとしているのも残念なことです。

ユキノシタの葉を火であぶってよくもみ、霜やけやはれもの、軽い火傷に貼ったり、若葉の汁を耳だれにぬったりしていました。また、中国では虎耳草（フールツアオ）と呼び、葉をかげ干しして、それをせんにじて子どものひきつけや百日ぜきに用いたり、日本と同じように霜やけや耳だれにぬったりしているようです。トラノミミという名前は中国の呼び名「虎耳草」に因むものと思われまます。キンギンソウは金

銀草という意味ですが、語源はよくわかりません。私はユキノシタは花が美しいうえ、食べられるし、薬にもなるので、むかしの人びとにとって大切な草だったので、「大切な」という意味をこめて金銀草と呼ぶのかなど、勝手に想像しています。皆さんはどう思いますか。

老いの雑記帳 ②⑧

雨の季節

お決まりのように梅雨の時節がやってきた。今日も朝から胸を濡らすようなシトシト雨が降っている。「雨は嫌いか？」と問われても、即座には答えられない。嫌いな時もあれば好きな時もあるからだ。

真夏の豪快な雨は好きだ。乾涸びた大地が一瞬にして呼吸を回復するからだ。それも夕立のような短い雨がよい。秋の雨も好きだ。広重の「近江八景之内・唐崎夜雨」のように絵になるからだ。しかし、冬の雨は好きではない。シト、シト、シトと人の心を奈落の底に沈めようとす



れている陰鬱な心に追い撃ちをかけられるようでイライラする。同じシトシト雨でも梅雨の雨とは違うのだ。梅雨のシトシト雨は大地にも生命を育むが、冬のシトシト雨は枯れた草木や凋（しぼ）んだ人の心にこれでもかと諦めを押し付けるようで嫌なのだ。降るなら降るで元気を貰えるようなドシャブリの雨なら歓迎だ。

日本には春夏秋冬の四季がある。その夫々に風情があるから、人はその移り変わりを色々な方法で表現してきた。版画では国貞の「五月雨の景」もその一つだ。しかし、自然の景と言っても雨に関するものはそれほど多くない。小倉百人一首には雪、月、霜などは多く歌われているが雨は一首もない。「春雨じゃ、濡れて行こう。」なんて名セリフもあるのに、なぜ和歌や絵画に雨が少ないのか不思議な気がする。歌謡曲では一杯あるのに――。

※「老いの雑記帳」はいったん終了、次号より「つれづれ歌談」（松岡初枝）がスタートします。

高校時代の同級生だった新田が電話をかけてきた。母方の実家の叔父が亡くなったという。

「あの青影城の城主だった赤川氏の末裔だという叔父さん？」

市内の峰田町に青掛山と呼ばれる山があって、そこに山城の跡がある。青掛山城、別名青影城、赤川城とも呼ばれ、赤川氏の持城だったと伝承されている。

「ああ、あれは叔父さんの父親のホラ話よ。もともと明治になってから赤川姓を名乗ったんで、まったく関係なし。叔父さんもその話になるとうんざりした顔をしょったな」

家柄に箔をつけたかったのだろう。まあ、よくある話だ。

大阪に嫁いでいる一人娘から、新田には従妹に当たるとののだが、叔父の遺品の整理を頼まれたのだという。奥さんに先立たれて、新田の叔父はもう十年以上、一人で暮らしていたらしい。

「本もかなりあるけえ、見てくれんか？」

市内の古本屋はうちだけなので、こういう依頼が増えている。

「くれるのか？」

電話口がしばらく沈黙した。

「わかった。捨てるんはもったいな

いけえ」

「まいどあり」

同級生はありがたい。

几帳面な性格なのか、部屋の中は整理整頓が行き届いていた。本棚の中は、農業や林業関係の専門書が多かった。国有林の管理の仕事を経験していたらしい。ネットで確認してみないとわからないが、高値で登録

新田猫

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子④⑤

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

できる本がけっこうありそうだ。

「二服すっか」

声をかけられて、雨戸を開けた縁

側に並んで腰を下ろした。雨が降り

出しそうな曇天を見上げて、缶コー

ヒーを口に含んだ。昨日が梅雨入り

宣言だった。

「煙草はやめたのか？」

「高校で辞めた」

同じ会話を何度となく繰り返して

いる。酒と煙草、還暦を過ぎても修学旅行のときの記憶がまだ鮮明に残っている。

「実は、見てもらいたいものがあるんだ」

新田が差し出したのは暑中見舞いの束だった。決まり文句のように、田植えを手伝ってもらったときのお礼が書いてある。そのあとに、俳句のようなものが書かれていた。

「そうじゃない。この川柳には埋蔵金のありかが隠されとるんよ」

大笑いして新田の顔を見たが、真剣だった。

「赤川氏の埋蔵金？」

「いや、森林の管理の仕事をしていて、土砂崩れのあった場所から発見したらしい。ひよっとしたら、尼子のもんかもしれん」

全国各地に埋蔵金伝説はあるが、中国地方では山中鹿介（しかのすけ）の埋蔵金伝説が有名だ。毛利氏に滅ぼされた尼子氏の家臣、山中鹿介が尼子再興に立ちあがったが無残に敗走、そのときに大根山山中に軍資金を隠した……。

「田植えが終わって、一緒に酒を飲んでいたら、そんな話になっての。うちは跡取りがおらんから、養子になってくれんかと口説かれたよ」

「赤川氏の末裔うんぬんの話と同じで、酔っ払いのホラ話じゃないのか？」

「おれもそう思うた。本気にせなんだら怒りだしてな。それで小判を一枚、見せてもろうた」

「本物か？」

「齧ってみたんだ。ちゃんと歯形がついた」

時代劇のシーンを連想して苦笑し

た。

新田の叔父は、パズルを解くのが好きだったという。自分でも作成して、子供たちに解かせて楽しんでいった。そして、新田に送った暑中見舞いの川柳に、埋蔵金の隠し場所のヒントがあるとはほめかしていたという。

「まあ、ダメ元でやってみるか」
暑中見舞いを年代の早い順に並べた。川柳だけをひらかなで書き写した。猫のヒゲが最初だった。
「ねうあらばひこねくた……」



「猫絵」の殿様(東毛歴史資料館企画展)のパンフレットより転載

頭の文字を横に読んでみたが意味をなさない。

「ゴエモンか……」
五番目の文字を横に読んでみた。「げんかんのくつばこのしたをほれ」
あっさり解読してしまった。

物置からシャベルを持って来て、交代で玄関の土間を掘り返した。半メートルも掘っただろうか。土色の甕(かめ)が出てきて歓声を上げた。しかし、その中に入っていたのは小判ではなく、小さな掛け軸だった。
「なんだこりゃ?」

新田が悲鳴のような声を上げた。猫の絵が墨で描かれていた。なんともどぼけて能天気な顔をしている。

「新田猫だな」

簡単に説明した。江戸時代に今の群馬県太田市に屋敷を構えていた旗本、新田岩松氏の歴代当主が四代にわたって描いた猫絵だ。猫の絵や版画は、農家の大敵だったネズミ除けに効果があると大切に掲げられた。その中でも新田岩松氏の猫絵は、徳川氏が先祖とした新田氏の血筋というブランドもあって、人気を博したという。もっとも、貧乏旗本の内職だったというのが実情らしい。

「やっぱり、ホラだったんじゃないの?」
「おれは違うと思う」

埋蔵金はあったのだ。この甕の大きさが証明している。しかし、そのあとのことを心配した。国有地から見つかった埋蔵金を隠匿したのだ。公にできる話ではなかった。それで、生前に処分した……。

「小判が入ってたら、どうするつもりだったんだ?」

「そりゃあ、新車を買って、旅行に行つて、うまいもん食つて……」

かぶりを振った。

「しょうもないな。やっぱり、猫に小判じゃ」

そうだなとわたしも相槌を打った。新田の叔父がこの絵を入れておいたのも、そうした意図があったのではないか。

後日談だが、新田猫の入っていた甕は古備前で、大阪の骨董商に三百万円で売れたという。新田はその謝礼を固辞して、新田猫の軸をもらった。自宅の玄関に飾っているのだが、汚くて下手くそな絵だと家族の評判は散々らしい。

わたしは引き取った蔵書で、ささやかな儲けを得ることができた。埋蔵金の行方は気になるが、わたしにとっても猫に小判であることは変わらない。

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL：090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「死ぬのによい日だ」

日本エッセイスト・クラブ 編 文春文庫

2009年に発表されたエッセイの秀作が収載されている。全部で55の短文作品、多士済々のメンバーが揃っている。五木寛之の「親鸞を書くということ」には倉田百三の名前が出てくる。大阪文学学校在籍の松本悦子「忘れ得ぬ福山空襲」には、家族の遺体をリヤカーで運ぶ情景が描かれている。少女は母親のちぎれた足を大切に持って歩いた……。

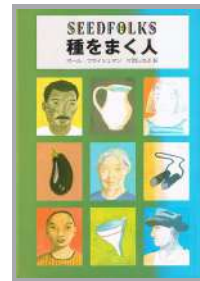


表題作は栄養学ジャーナリストの丸山康生の作品。料理研究家だった父親の丸山淑生の遺作「今日は死ぬのにとってもよい日だ」へのオマージュ。食道がんを告知されてからの穏やかな日々、かく死にたいと心に念じた。エッセイを書いてみたい人にお薦め。

「種をまく人」

ポール・フライシュマン 著 あすなる書房

物語の舞台はアメリカ北東部のオハイオ州クリーヴランド市。貧民街にある空き地に、ベトナム人の娘、キムがライマメの種を植えたのが始まり。そのあと、ひとり、またひとりと、年齢、人種、境遇の異なる人が故国の種をまき、不法投棄の生ごみや粗大ごみが散乱していた空き地が、いつしか立派な菜園へと変貌する。以前は敵視していた人々の間に会話が生まれ、仲間としての連帯感が育まれ……。



ファンタジーだが、種をまく人の境遇が残酷なまでにリアルに描かれている。「無数の岩の割れ目に無数のカニがうごめいている」、インド人アミールのアメリカの印象。人間には、いや生命には大地が必要なのである。

「赦し」

矢口敦子 著 幻冬舎文庫

ゆるし、と読む。帯の表記では、70万部突破のロングセラー「償い」の続編。「赦し」の方を先に読んだ。かつては大学病院のエリート外科医だった男が、仕事で犠牲にした妻子への罪悪感で医師を辞め、日雇い労働者としてひっそりと生きている。世捨て人のような男が遺産相続の騒動に巻き込まれ、その途中に幼児虐待の死亡事件に遭遇する……。



他の本に浮気しないで最後まで読み通したのは久しぶり。主人公の内面が丹念に描かれているのですぐに感情移入することができた。もちろん、好感&共感が前提だ。主人公がホームレスだった「償い」も続けて読了。厭世感が心地良いのかと自問。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくる俳壇&歌壇

紫陽花を親しみ人をまだ知らず

近藤 昌平

ウイルスの収束みえず花は葉に

片岡 正人

柏餅秘伝の味と言いし店

隆愚

幾千の秀句を残して櫻散る

大槇 三代子

神々の巨杉の古道著莪の花

赤川 冬人

いにしへの人は故郷想ふ時

松岡 初枝

つつが無きやと現在はコロナか

投稿&寄稿

「トイレットペーパー」 赤川仁洋

コロナ禍がようやく収束気配だが、その傷の大きさや痛みを実感させられるのは、完全に終息した後な

てきた。

驚いたというか、呆れたのが、コロナ騒動初期のトイレットペーパーが無くなるというデマ。空になった棚を放映するなどしてマスクミが風評被害に加担、かっつてのオイルショックのときの教訓がまったく生

かされていない。

来店したお客さんと、トイレットペーパーについて話題になったことがある。わたしが幼かった昭和四十年前後では、祖父母の家のトイレは汲み取り式で、B6判大に切り分けられた新聞紙が箱に入っていたのを覚えている。祖父は薬店を営んでいて、店頭にはチリ紙が山積みされていたはずだが、儉約のために新聞紙を使っていたのだろう。

中東のトイレでは、トイレットペーパーは置かれていない所が多いらしい。便器のそばに手洗いの水場が設置されて、お尻の汚れを拭き取った左手を洗浄する。イスラム教では左手は不浄であって、食事は必ず右手ですするという。

昔の日本はどうしていたかという

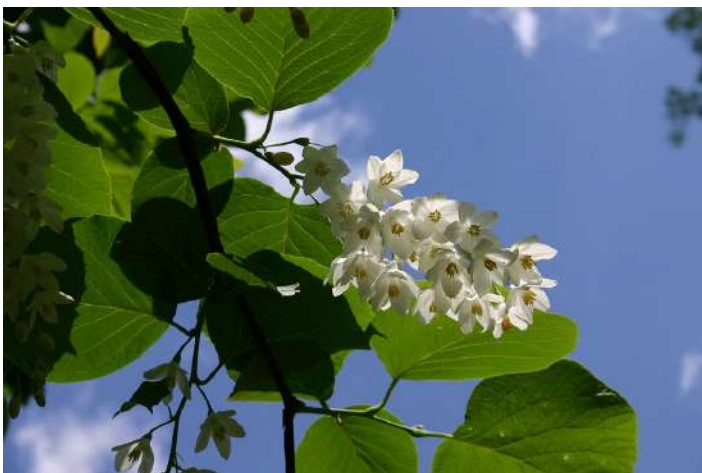
と、農家では藁や縄など、江戸の町中では「浅草紙」と呼ばれる簡素な再生紙を使っていたようだ。リサイクル都市だった江戸では、糞尿は野菜の貴重な肥料となり、浅草紙もできただけ回収されてまた再生されていた。

「お尻を拭くにはね、ハクウンボク（白雲木）の葉がいいんですよ」
小学校の教師をしていたというお客さんに教えていただいた。

「大ききではホウノキ（朴ノ木）やカシワ（柏）だけど、あれは破れやすくてね。ハクウンボクは柔らかく破れにくいんですよ」

野外学習のときに、生徒たちに実践させて好評だったという。青空の下、ハクウンボクの葉で自分の尻を拭っている光景が浮かんで、高原の涼風が吹いた。いざとなったら自然に帰ればいい……。

ヒステリックに批判を繰り返す画面に辟易して、テレビを断捨離することができた。コロナ禍での最大の収穫である。



郷土の本棚⑬ (文責・赤川仁洋)

「鮎すし」 徳永真一郎著

四百字詰原稿用紙換算で四十枚ほどの短編。主人公は瑤泉院、忠臣蔵で吉良上野介と刃傷騒ぎを起こした浅野内匠頭の正室、阿久利姫が出家したときの院号である。

瑤泉院が暮らす赤坂南部坂の浅野土佐守長澄の中屋敷に、赤穂浪士の一人である菅谷半之丞からの届け物が手渡される。瑤泉院の郷里、三次の名物である鮎と麻の実だった。

「豆腐粕に麻の実を入れて、酢で味をつけ、鮎をのせてにぎるのは、三次名物の鮎すし。冷光院さまご生前の、大好物にござりましたな」

持参した自家の奥家老の言葉。冷光院は切腹した内匠頭の院号である。

菅谷半之丞は、江戸藩邸が大火にみまわれたとき、瑤泉院を救出した恩人であり、今は半之丞の叔母の嫁ぎ先である三次藩士の家に逗留しているはずだった。

聡明な瑤泉院は、鮎すしの届け物に、旧臣たちの仇討ち決行が近付いていることを知る。瑤泉院の心は暗く沈んだ。首尾よく上野介の首を討ち取れたとしても、大石内蔵助を筆頭に、多くの忠臣たちを死地に追いやることになる。彼女は、五歳で三次から赤穂に嫁ぐときに、国家老として三次まで迎えに来た内蔵助に、思慕の情を抱いていた。

夫の長矩(内匠頭)は婚儀のときに十二歳。生まれて間もなく母を失い、父の長友も三十三歳で逝き、家督を継いだ時は九歳だった。阿久利姫も幼少時に両親を亡くしている。

女性の視点で描いた「忠臣蔵外伝」、浅野家に伝わる怨霊伝説が影を落としている。作者は単なる英雄譚ではなく、時流に翻弄される女性の本音



徳永真一郎
長野主膳斬首

蝦夷樺太を踏破した驍足むなしく幽囚の近藤重祿、雪の松田に一代の野望潰えた長野主膳——歴史の歯車に圧殺された人々の痛恨の譚。

時代小説作品集

を書きたかったのではないか。

「鮎すし」は昭和三十六年の「大衆文芸」五月号で発表され、後に徳永真一郎の時代小説作品集「長野主膳斬首」(光風社出版)に収録されている。

「広島から東北へ十五里、中国山脈にかこまれた盆地の町三次は、西城川、馬洗川、可愛川が、三つ巴に流れ、町はずれで合流して江の川となり、山峡を縫って北に走り、遠く日本海にそそいでいる。毎年、秋になって空気が冷えだすと、三つの川からたちのぼった水蒸気が濃い乳色の霧と

なって、三次盆地に深くたれこめ、昼すぎまではれなかった。」

作者は昭和二十七日三十一一年まで毎日新聞広島支局に勤めていた関係で三次にも何度か来訪している。さすがに現地を知っている人の描写である。

鮎寿司にはわたしもいささか思い入れがある。自宅で介護していた母親の好物だった。「何か食べたいものはない？」と訊くと、必ず出たのがクリームパンと鮎寿司だった。

母親の食が進まないときは、地元庄原かんぽの宿に行つて、その売店で鮎寿司を買い求めた。在庫がないときは、販売元である鮎共販の三次市十日町にある本店まで行ったこともある。歯のない母親に食べさせるために、酢飯替わりの味付けした卵の花を指先で小さく丸めて、酢漬けた鮎を小さく刻んでその上に載せる。

「鮎すし」というタイトルを目にした時に、発酵を含んだ独特の匂いを鼻先に感じた。亡き母との大切な思い出である。

※「鮎すし」が収載された「長野主膳斬首」は、どら書房で閲覧&貸出ができます。



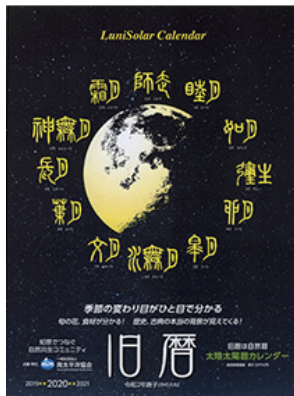
三次市・鳳源寺にある瑤泉院の像

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

◇◆◇どら書房郷土資料本コーナー◇◆◇

郷土史関係の本や地元で出版された本、地元の方の作品集（短歌俳句小説等）、地元に関する本を揃えています。非売品で閲覧&貸出（無料）しています。寄贈も歓迎します。
※「築地人形」（青木笙子著）もあります。



「旧暦カレンダー」（販売価格：1,650円）

- ・日本の自然に根差した暦（こよみ）です。
- ・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- ・新暦（太陽暦）も併記しているので便利です。
- ・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- ・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和2年度版、好評販売中！

※今年のはうるう月のある年です。

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター（現地記者）募集！
- ※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載している
ので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

ー 絵本の無料レンタル ー

イベントや集会の時などにお使いください。

「箱貸し」します。

図書館の除籍本や販売には難のある本ばかりなので、破損しても大丈夫です。

ご希望の方はどら書房まで。

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売（値札のないものは百円均一）。
毎週水曜日の朝に入荷予定（元旦はお休み）。

●黒ニンニク好評販売中！● （青森産ニンニクホワイト六片使用）

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの
効果が期待できます。

（80g入り 500円）

※売り切れのときはご容赦ください。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@sannet.ne.jp
年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

◇告知するイベント情報がないので、「どらくろあ掲示板」が手前味噌になっていきますが、ご容赦ください。

◇「老いの雑記帳」、人気連載でしたが、今回でいったん終了、次回からどらくろあ歌壇に作品を寄せていただいている松岡初枝さんのエッセイが始まります。わたしも和歌や短歌のことをもっと知りたいです。

活です。

◇「老いの雑記帳」、人気連載でしたが、今回でいったん終了、次回からどらくろあ歌壇に作品を寄せていただいている松岡初枝さんのエッセイが始まります。わたしも和歌や短歌のことをもっと知りたいです。

編集後記

◇コロナ禍も下火になり、五月で中止になった九日市も六月に復活します。イベントがすべて中止となっていて、なかで、時勢を柔軟に判断した英断だと思いますが、用心のためにマスク装着のご協力をお願いします。本誌もページ数が増えます。

第 232 回

しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 2 年 6 月 9 日 (火) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
休 館

★楽笑座で「まかない食堂」中 止

★楽笑座で「うた声喫茶」中 止

★どら書房 →休憩所あります！！

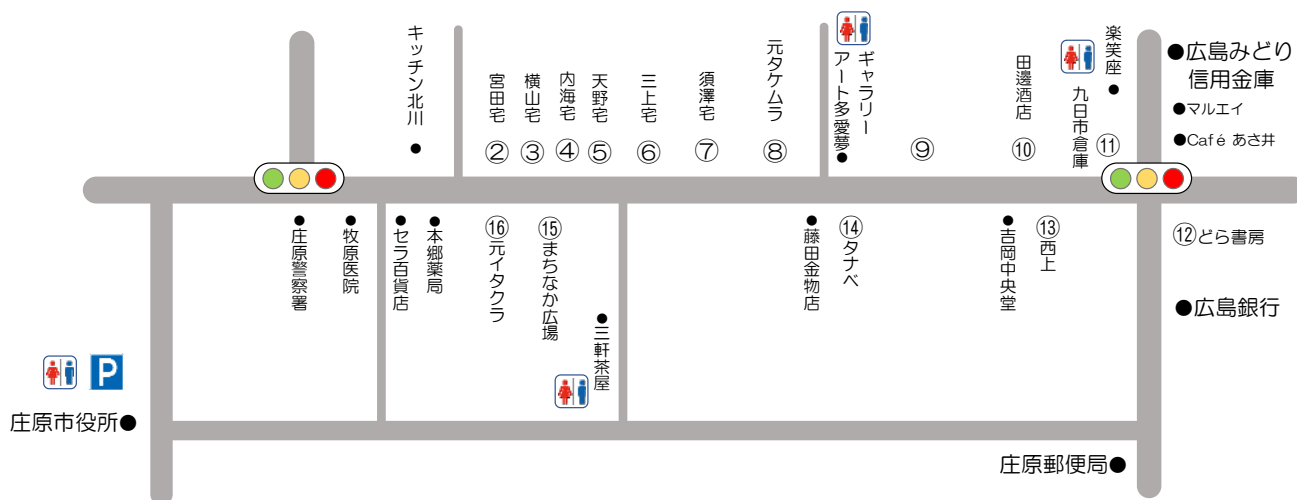
月曜日と火曜日はお休みです。

但し、九日市の日は営業します。

★きくや →総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍 →九日市スペシャルで餃子 200 円！

出店配置図



②タラワーフード

③文屋

④お福郷屋

⑤工房アム
かぐや姫
めくもり
ちくちくはうす玉手箱

⑥めだかの学校
美・sfida・三次サロン
和み屋
クラフトショップ
Room of keiko

⑦農楽会

⑧とらち
二八そば加工所
アーミッシュ
さだっさ
健康企画
ふくふく牧場

⑩克國水産

⑪お休み

⑫どら書房

⑬久代水産
くんえん工房 香豚
吉備路花田 F F

⑭まなべ商事

⑮昭助
どんぐりーず
宮川屋
佐藤園芸
田崎屋

⑯お休み

出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

